



# オランダ雑感



工学部 白浜博幸

1988年9月から約1年間、私はオランダの首都アムステルダム (Amsterdam) からインターシティ (Intercity) という快速電車 (日本の急行または特急に当たる) で約1時間の東南の距離にあるワーゲニンゲン (Wageningen) の街に留学のため滞在していた。留学先は、Dept. of Physical & Colloid Chem., Agricultural Univ. で、「タンパク質の競争吸着」というテーマで研究を行ってきた。

御存知のように、日本とオランダの関係は17世紀初めから続いており、江戸 (鎖国) 時代には自然・人文・社会科学などの分野において蘭学から多くの西洋知識を学んだ。中でも、「シーボルト (彼は正確にはドイツ人である)」の与えた影響は多大なものがあった。ライデン大学 (オランダで最古の大学) のあるライデン (Leiden) 市には彼を記念した博物館があり、浮世絵等彼が日本から持ち帰った品々が展示されている。

オランダは国土の約4分の1が海抜下にあり、この国の歴史は常に海との戦いだったと言っても過言でない。これを反映してオランダ人気質は忍耐強い、合理主義、地味で反骨精神が強いといったところであろうか。確かに合理的であるが、巷間言われている彼らが「ケチだ」という印象は私は全く受けなかった。人にもよるが、概して彼らは親切で好感が持てた。しかし、第二次世界大戦で日本から受けた屈辱と被害を忘れていないのも事実である。あの「昭和天皇」の戦争責任問題でもイギリスに続いて厳しく批判報道していたのはオランダであったように滞在中感じた。

オランダと言えば思い出されるのはやはり風車とチューリップであろう。蒸気や電力の

動力源がなかった時代には、穀物をひいたり干拓の排水用として大いに利用されたが、現在稼動しているものは少ない。写真の風車は、アーネム (Arnhem, この都市は第二次大戦の激戦地で、映画「速すぎた橋」で有名な所である) の国立野外博物館にあるもので、周囲の風景によくマッチしている (と勝手に筆者は思っている)。ここには、オランダ各地の古い民家や道具などが展示されている。また、この近郊にはオランダを代表する画家ゴッホの作品を多く集めたクロラー・ミューラー美術館 (アムスにある国立ゴッホ美術館とともに有名) がある。有名な画家の絵画もゆったりと間近に鑑賞できるのは、一般的に言ってヨーロッパの美術館の魅力である。経済大国となった日本を振り返ってみると、物価高や仕事等日々の生活に追われ、文化や生活を楽しむゆとりさえ失いかけているような気がした。



風車

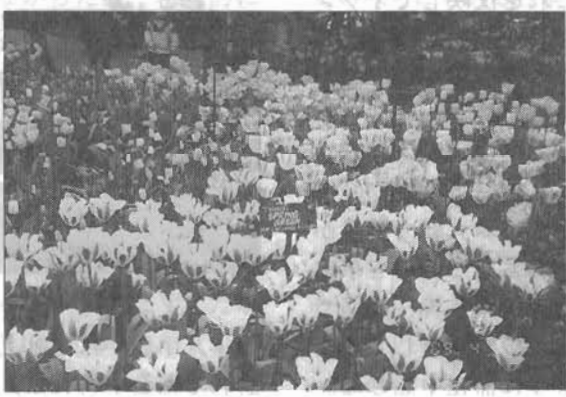
4月中旬から5月上旬にかけてオランダを訪れる機会があれば、チューリップの公園として有名なキューケンホフ (Keukenhof) の地をお薦めしたい (ライデン市の近くのリセ

(Lisse) という町にある)。日本ではあまりお目にかかれないような色と形の膨大な数のチューリップ (写真参照、カラー印刷ではないと思うので色をお見せできないのが残念である) が咲き誇る様は実に美しく見事と言うしかない。フラワービジネスは日本でも今後成長が期待される業種である。花を家庭でも楽しむことは大いに賛成であるが、日本では価格が高すぎるのが難点である。オゾン層破壊、CO<sub>2</sub>による温室効果 (Greenhouse effect)、酸性雨による森林破壊など地球的規模で環境問題が深刻となっている。他国と陸続きで土地の低いオランダではこのことに関する危機感は強く、滞在中に行われた国政選挙でも重要な争点の一つであった。日本ではこのような地味ながら重要な問題が選挙の争点となりにくいのには寂しい気がする。いつまでも地元利益最優先の金のかかる選挙では、世界から「経済一流、生活二流、政治三流」と呼ばれても仕方ないのかもしれない。

私の滞在していた宿舎は International Agricultural Center (通称 IAC) と呼ばれていた。依然として農業の先進国であるオランダには外国から多くの人々が研修に訪れており、IAC でも種々のコース (例えば Vegetable Growing) において研修を受けていた。お陰で私は世界各国のいろいろな人と話したり友達

になることができたのは幸運であった。所変われば文化・言語・習慣が随分異なることを実感した。単一民族国家 (実際は正しくないが) で島国である日本にいと分かりにくいのが、真の意味での国際化とは、個人のレベルでそういった種々の差異を認め合った上で、調和を保ちながら共存していくことではなからうか。

日本の風土にはなじみにくいが、欧米社会でお互いをファーストネームで呼び合う習慣は良いと思う。これは何も礼節を軽視せよという意味ではない。こう呼び合うことによって妙に親近感を覚えるのは確かなことである。日本ではあだ名がこの役割を果たしているのかもしれないが……。それにしても私は日本人 (日本に永住している人すべてをこう呼びたい) および日本という国が好きである。これまで述べてきたような悪い面も確かにあるが、日本の四季の変化の美しさ、日本料理のおいしさ、複雑ではあるが日本語の美しさ、勤勉な国民性、伝統文化の素晴らしさ等々誇るべき事柄も多い。今後、こういった美点は残したままで、真の意味で日本が国際化されることを願ってやまない。「オランダ雑感」と題しながら、最後は一種の日本論となってしまったことを編者におわびしたい。



チューリップ